

---

# 1 章

---

## スポーツ コミュニケーション とは何か

---

- 1 スポーツの楽しさの解明と裏づけ
- 2 指導者もつ着眼点を解明したい
- 3 傷ついて考える、自己改革が指導者としてのスタート
- 4 自分自身が指導者として成長したと思われる瞬間はどんなときか？
- 5 指導者の考えを押しつける指導法からは生まれるものは少ない
- 6 勝利のために厳しさばかりを追求していた日々
- 7 選手の心に飛び込むためには？
- 8 練習前が選手の意欲のバロメーター
- 9 指導者の想いを選手と周囲に伝えることが勝利への近道
- 10 指導者と選手の秘密をもつ、想いを共有する、そして選手の役割をつくるのがチーム力につながる
- 11 アスリートが獲得するライフスキル
- 12 スポーツの魅力とその発信、アスリートの力を社会貢献に！

## 1 スポーツの楽しさの 解明と裏づけ

私は現在、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）で「スポーツコミュニケーション」という講義を行っています。そこには「スポーツに出会ってよかった！」という学生が集まってきます。その講義や研究会のなかで「スポーツの楽しさの裏づけ」をとっていくと、受講している学生諸君は「あ〜、確かにそうだった」「自分もそういう気持ちがあった」「そういう経験をした」と共感できることが多いようです。

そこには必ずと言っていいほど、自分自身を取り巻く仲間やライバル、指導者の存在が出てきます。そのときの状況を思い返し、「楽しさの裏づけ」を解明していくなかで、自分自身や他者との関係性を考えてみれば、もっとこうできたのではないかと納得したり、後悔したりという状況が新たに生まれてくるようです。スポーツは瞬時の判断が必要な状況が常です。そうしたなかでは、じっくり考える時間を確保したり、その必要性を感じないこともあると思います。しかし、私たちがスポーツを通じて、瞬時に判断していることをじっくり振り返ってみると、新たな発見があることに気づきます。それが新たな考えや行動をする際の指針にもなってきます。

さらに「するスポーツ、観るスポーツ、支えるスポーツ」のいずれにしてもスポーツの魅力を感じたり、発信したりすることは他者の存在が大きいと感じています。そうした観点から本書では、スポーツを通じた他者との関わり、スポーツコミュニケーションについてスポーツの楽しさの裏づけを解明していくことにしました。

## 2 指導者がもつ着眼点<sup>1)</sup>\*1を 解明したい

※1 「着眼点」について諏訪・西山（2009）は、たとえばアスリートが、アスリート自身とそれを取り巻く環境とのつながりのなかに見出すことから、アスリートが身体の動かし方の「何」に着目して考えることや、指導者が「何」に注目して指導をするのか、その「何」が着眼点であるとしている（文献1より）。

私は、11年間ハンドボール部の男子高校生の指導を行いました。「勝利」という目標を掲げたものの、長く暗いトンネルを抜け出せずにはいません。私自身の指導の時期を振り返ると、①未熟な自分によりやく気づいた時期→②選手とのコミュニケーションに悩みながら勝利に向けて模索する時期→③ようやくチームづくりのノウハウが整理されてきた時期、に分けられ、今、考えてみても人間的に鍛えられたときだったと思います。

結果的には、11年目に全国の頂点に立つことができましたが、振り返ると失敗から学んだ経験が多く生きたと思います。その間、ついてきてくれた選手諸君には、今でも「未熟な私で申し訳なかった」という気持ちでいっぱいです。



全国大会優勝の瞬間。熊本インターハイ（2002）

私の指導理念はスポーツを通じた人材育成にありました。自分としては人間性の指導を行っているつもりでも自分自身が未熟なために、「勝つ」（競技力）ことだけが優先されるような指導になったのではないかと感じています。

指導者の着眼点は、指導経験の成功体験や失敗体験を多く積み積むほど磨かれていくと考えられます。指導がうまくいかず、時には傷つき、時には悔しさに涙を流すことがあるかもしれませんが、ここには「実践して考え、分析し、気づき、次に生かす（実践）」というサイクルが徐々に確立され、そしてそのなかで人とどのように関わればよいのかという自分自身の着眼点がつくられていくと思われま

す。私自身も現場でのそうした経験を通じて、指導者としての着眼点がつくられていったと感じています。指導の際に発生する選手とのコミュニケーションをはじめとする数々の指導上の悩みについて、それをどのように解決していったかを事例を交えて解説しています。

### 傷ついて考える、 自己改革が指導者としてのスタート

## 3

前述したように、私は高校生の男子を対象に11年間ハンドボール競技の指導に携わりました。失敗が多く、常にこれではいけないという自己改革の連続でした。苦しかったのですが、そのたびに新しい視点が生まれ、11年目によりやく全国の頂点に立つことができました。その過程では心が折れそうになったこともあり、当時、遠距離恋愛をしていた現在の主人には、結局10年近く、結婚のGOサインを待ってもらうことになってしまいました。

私はスポーツにおける人との関わり合いは、確実に人を成長させる

と実感しています。では、どういったプロセスが指導者を成長させるのでしょうか？

ある日の出来事です。練習コートに行くと選手1人が残っているだけで、多くの選手が見当たりません。一瞬、何が起こったのか……。実は、私の指導が嫌で選手が練習を放棄したということがわかりました。私は憤慨しました。「私の何が悪いのか、選手は何もわかっちゃいない」、そう私は自分に言い聞かせました。悔しくてたまりませんでした。私のプライドは大きく傷つきました。しかし、時間が経つにつれ、自分を振り返ることで自分のふがいなさを痛感するようになってきました。それに気づくようになったきっかけは、「選手がゼロになってしまっただけでは、何も指導ができない。たとえ100点満点の選手でなくとも、仮に今は30点、40点の選手であっても、指導することで60点にも70点に引き上げることができるんだよ」という当時の監督の新井善文先生が私にかけてくれた言葉でした（当時、私はコーチという立場です）。私は、そこで選手が無（ゼロ）の状況にしてしまっただけでは、何も始まらないということに気づいたのです<sup>2)</sup>。

## 4

### 自分自身が指導者として成長したと思われる瞬間はどんなときか？

自分自身を振り返ってみると、指導者として成長するスタートは、自分自身が力不足だと実感できた瞬間からでした。自分の勝手な思い込み、自信過剰な部分、要するにピノキオの長い鼻が折れた瞬間でした。私のピノキオの鼻はよく折れました。私は新卒で高校の教員となったわけですが、それまで大学でやってきた自分の考えが一番正しいと思いついて、まったく他の人のアドバイスが耳に入りません。

しかし、選手は正直でした。私の組み立てた練習メニューを、嫌々ながら取り組む選手がいました。私が女性の指導者だから甘えが出るのか、それを表情に出すのでよくわかりました。「なんだ、その態度は！ やれっ！」と一喝して練習に取り組ませることは簡単ですし、指導現場でもみられる光景です。でも、それがなぜ選手にとって、あるいは勝つために重要なのか、理論的な構築が自分のなかにはありませんでした。「いいから、やれっ！」というのは、ハンドボール嫌いを生み出す言葉であることはわかっていました。

それから私のなかでは、嫌々ながら取り組む選手をなくすことが目標になりました。選手が達成感を終えて帰宅するときは、私も指導者としてきちんとやり遂げた、責任を果たした安心感がありました。しかし、選手の表情が曇って（何かしら不満をもって）帰宅するときは、その要因をとことん考えました。自分の選手に対する言葉の発し方や練習のメニュー内容、これでよかったのか、選手を大きく傷つけたこ

#### ■ コーチング

1

ノンバーバルコミュニケーションを積極的に受け入れよう！ 選手が「はい」と大きな声で答えても、なぜこんなネガティブな姿勢をみせるのか、そのきっかけや選手の心理状態を指導者はノンバーバルから読み取らなくてはならない

とにつながったのではないかと、帰宅してからも反省しきりで考え抜いた日々が続きました。翌日の練習が始まり終わるまで、いつも私のなかに「考えて」練習を組むというトレーニングが続きました。

自分の力のなさを痛感せざるを得ない状況が、毎日私の前に立ちただかりました。それは、選手が「嫌々」をノンバーバル<sup>3)</sup>※<sup>2</sup>で表現してくれたので、私が「これではいけない」の毎日になったのだと思います。練習メニューの意味を考えて教材をつくっては試しました。選手が練習を受け入れるとき、受け入れないときはどのようなときか、選手が満足をしていない練習はどんな練習か、試行錯誤の連続でした。しかし、練習で選手が達成感を得たときは明るく元気に取り組み、ハンドボールを心から楽しんでいるように見受けられました。それは、たとえ苦しい練習の場面でも見受けられました。

## 指導者の考えを押しつける指導法からは生まれるものは少ない

5

指導者として自分の指導スタイルを確立するまで、私の指導者としての芯は大きくぶれていたと思います。「型にはめ込む押しつけの指導法」と「選手に任せる指導法」、これら2つを行ったり来たりしていました(図1)。

「型にはめ込む押しつけの指導法」は、いっさい選手の意見を聞かず、とにかく同じ動きやパターンを覚えさせる、鍛えるといったやり方です。もちろん、この指導法が試合の大事なところで威力を発揮することもあります。しかし、そこには選手の考えはまったく反映されていません。やりすぎると、選手は練習についていけなくなり、選手にとってまったくおもしろみのないハンドボールになるのです。ですから、高校の現役を終えるとコートに顔も出しませんし、卒業してもハンドボールを続ける選手はいませんでした。

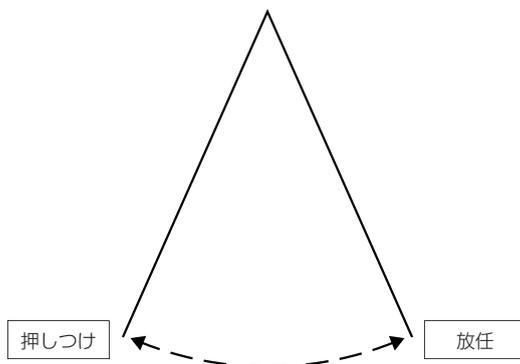


図1 指導に迷う日々  
選手とどうコミュニケーションを図ってよいかわからない。指導法でも振り子のように「押しつけ」と「放任」を行き来する

※2 畠山・西田(2003)は、人間が行うコミュニケーションの分類はバーバル(言語)とノンバーバル(非言語)であるが、人間同士のコミュニケーションでは、言葉のやりとりのほかに身体動作や対人空間が大いに寄与するとしている。たとえば口では自信ありげな発言をしているが、顔から汗が噴出し、ひざが震えている人を考えると、自信があることを意識的に伝えられているが、身体は無意識に不安を表現しているといった印象を受ける。このようにバーバル情報だけでなくノンバーバル情報を認識することで本当の意味を認識できるとしている(文献3より)。

**コーチング 2**  
振り子のように行き来する迷いの指導から、自分の信念をもてる指導をみつけよう

やがて、私の考えを押しつけるハンドボールには限界があると感じました。選手に考えさせることが重要だとわかってきてからは、その時間をとろうとするのですが、そのやり方がまた極端でした。練習メニューをすべて選手に任せてしまいました。選手が練習メニューの相談にくるのですが、適切なアドバイスができなかったと感じています。そして何より、選手とのコミュニケーションが困難であると感じていた時期でもありました。私は、選手に任せて「考えさせる」という指導法をとるものの、それはある意味、練習放棄であったと思います。練習はただだらりと進行し、結局失敗に終わりました。この極端な2つの指導法は「振り子」のように行ったり来たりしました。いずれにしても、選手が主体的に取り組むための自分の引き出しが不足しているのを感じました。またそれを選手が察すると、信頼が薄らいでいくこともわかりました。自分の力のなさを情けなく感じつつも、「でも、負けられない」、どういう練習が選手のやる気を引き出すのだろうか、そういう思いで、私は必死にハンドボールの教材研究をしました。

選手が主体的に取り組むことができるようになるには、選手と指導者との心のつながり、信頼関係が必要です。しかし、当時の私には、スーッと選手の心のなかに入って行けるような策はみつかりませんでした。そこで、ハンドボールが楽しいと感じるようになれば、同じ目標に向けて進めるのではないかと考えました。それまでは、そのための準備を怠っていたと思いました。選手が主体的に取り組むことのできる仕掛けのある材料をつくり、両者の努力が目標に向けて達成もしくは、その達成のプロセスを実感できれば、信頼関係はつくられていくと感じました。しっかり材料を準備すれば、その成果である試合も楽しみになりますし、その成果を出してくれる選手に期待もします。そして、自分のなかでたくさんの仕掛けのある材料ができれば、選手が主体的に導く方法を自分のなかでイメージできるようになっていくのではないかと感じていました。

## 6

### 勝利のために厳しさばかりを追求していた日々

「そうだ!」。そのとき私は選手に厳しさばかりを追求して、厳しいことを乗り越えることが勝利に直結するものと勘違いしていたことに気がつきました。厳しさはもちろん必要です。しかし、ハンドボールを楽しみと思える仲間や自分自身の技術の向上、毎日の練習における達成感の積み重ね、それが試合で実を結んだときの満足感と次への意欲、そうしたプロセスがあって、初めて厳しいことを乗り越えられるのではないかと感じていました。

もし、選手が私の練習メニューや指導法に対して、すべて鵜呑みに

する選手の集団であれば、私は何の疑問も抱かず、いつまでも面白くない指導を繰り返していたと思います。選手のネガティブな反応が私に「これではだめ！」ということを感じさせてくれることになったのです。そして、「考える・分析する」→「実践する」→「振り返る・気づく」というサイクルが私のなかで常に組み立てられていったのです。

人は「だめだ、だめかもしれない」という追い込まれた状況にならなければ、自分の間違いや勘違いに気がつかないことがあります。そういった意味においては、選手が私に「そんな指導ではだめだよ」と追い込んでくれたと思います。

選手は練習試合や公式試合、体力評価テストなどを通じて、自分自身の出来、不出来を評価されることとなります。それによって自分自身を不甲斐なく思ったり、自分の技術の向上に喜んだりと常に自分自身を振り返る場面が多くあります。また、指導者も選手自身に自分自身がどうなのか、だめなのか、いいのかを問い、そして次へのステップを期待するのだと思います。

一方、指導者も「自分はどうか」、この問いかけを忘れてはならないと思います。そうした視点を指導者がもつことで、選手が現役を終えた後も「自分はどうか」と問いかけることができる人間になれると考えています。

## 選手の心に 飛び込むためには？

# 7

選手の「考え」を引き出すために選手にどう言葉をかければよいか、私自身のなかにもいつも迷いがありました。私は、選手に対していつも厳しい言葉ばかりをかけていました（これが選手の考えを引き出す戦略的なものであるなら別ですが……）。当時はいつも選手の伸びにまだまだという気持ちばかりが先走り、選手の気持ちを引き出す指導法や余裕はありませんでした。気持ちを引き出すためには、相手の状況を把握したり、言葉を引き出すために待つことも必要です。しかし技術練習では、時間が限られています。そう待てるというものでもありません。とはいえ、いつも一方的に練習の指示をする指導者と指示を待つ（当時は“指示待ち症候群”と呼んでいた）選手との間には選手の主体性は生まれません。私は選手とコミュニケーションを図ろうと言葉をかけました。ですが、選手の反応は薄く、言葉も表面的で、気持ちが通じ合っていないのを感じました。さて、どうするべきだろうか……。選手の心のバリアを破って、選手の心に突き刺さる言葉はどうしたら生まれてくるのだろうかと考えました（図2、次頁）。

いつも一方的に指示している自分。では、選手の考えを聞いてみよ

### コーチング 3

指導者は、現状がどうか常に客観的に自分をみつめよ

### コーチング 4

指示待ち症候群をつくってはならない!

### コーチング 5

選手の心にあるバリアを破って言葉を響かせよ!

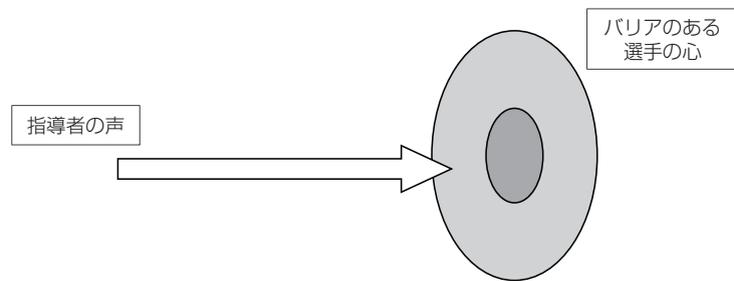


図2 選手の心にあるバリア  
選手の心に響く言葉を探すにはどうしたらよいだろうか

### ■ コーチング 6

相手がなかなか話してくれないときは、

- 1) 答えやすい質問から質問する
- 2) 選手が答えたらまずは受け入れる！ 否定せず肯定する
- 3) 「ふ～んなるほどね」と共有する
- 4) なぜそう思ったのかと聞いてみる

### ■ コーチング 7

選手に先入観をもたず、自分の心をまっさらな状態にする。選手の嫌な部分を、時には自分の頭でリセットするという発想の転換が、相手に自分を受け入れてもらえる方法の1つである

### ■ コーチング 8

勇気をもって選手を誉めよ！

### ■ コーチング 9

心をリセットして傾聴せよ、コミュニケーションは傾聴することから始まる！

う。そう考えた私は、作戦ボードの前で選手に質問してみました。いきなり難しい質問には答えられないので、答えやすい問いからと思い、質問を投げかけてみました。そして選手の回答を「なるほどこういうことね」と肯定し、繰り返しました。その瞬間、選手は目を丸くし、驚きを隠せないという状況でした。私は自分の自己改革（よし、今日から変わるぞ！ という気持ち）に気づかれないようにさっと次の練習を指示しました。実際、自分のなかに照れもありました。選手を誉めたことのない指導者が、選手を誉めることは勇気があることだと思います。しかし、その後の練習は水を得た魚のように勢いのある練習が展開されました。傾聴する姿勢をみせることで、話し手の考えを導き出すという、この姿勢は今までの私にはまったくないものでした。

私は、その日のノートに「よし、選手に一步近づけたようだ」と書き込んでいます。そして自分のなかのわだかまりが何であったかのかも自分自身で分析して書き込んでいました。自分の思い込みがわだかまりにつながっていく。それがわかれば、いつでもどこでも自分の心をリセットできる、誰とでも良好なコミュニケーションを図ることができるということを実感したのです。

## 8

### 練習前が選手の 意欲のバロメーター

練習前に選手はイキイキ、ワクワクしていますか？ それとも諦めに似た暗～い表情をしていますか？ 練習前の選手の表情を観察すると選手の心理がよく表われています。選手が沈んでいるときは練習に対して意欲がないときなのです。技術的な要素のほかに体調不良や家庭でのいざこざ、そして学校で叱られたことなど、選手は実にさまざまな事情をもって練習コートに現れます。練習開始前は練習に入る前の心身ともに重要な時間です。私は練習以外の時間を使って、部員に自分の技術を向上させるための練習を行うように言っていました。アスリートであれば、勝つためには人より多く練習するのが重要な要素

になってくるはずですし、指導者からすると「当たり前」です。しかし、その当たり前のことができていない。しかも彼らは練習前に黙って座り込みコートを見つめるだけで、何も動こうとせず、時計の針が午後4時の練習開始時間になったらようやく集合するという状況でした。この状態をどうしたらよいのだろうか？ なぜ自分が試合で通用しないことがわかっているのに、空いた時間に自ら練習しようとしなのか、不思議でなりません。私はこの状態が我慢なりません。しかし、重い腰を上げようとしないうちに彼らを一方的にこれまでと同じように叱りつけても意味がないと感じていました。

そして、私がとった対策は、コートで遊ぶことでした。私は思いきって選手を誘いバスケットボールをしました。これ以上落ちることのないチームだから、何か思いきってやってみよう！ 練習前に遊ぶということを取り入れ、私が明るく振る舞えば、もっと明るくなるかもしれないという考えがあったのです。発想の転換でした。その考えはうまく当たり、選手は次々に重い腰を上げ、それぞれに鬼ごっこをやってみたり、サッカーをやってみたり明るく動き回るようになりました。

全国で勝利することができたチームは、授業が終わるといち早くコートに駆けつけ、サッカーやバスケットボールをしながら勢いよく遊んでいました。すると練習前と練習に入る瞬間の切り替えにメリハリがついていきました。このメリハリが、ハンドボールの練習に勢いをつけてくれていました。もちろん、それだけが要因ではありませんが、彼らはハンドボールを心から楽しむようになりました。私はそれを「ほんやりコミュニケーション」と呼んでいました。ほんやりと選手を観察し、自分自身の心と身体をリラックスさせて、選手とコミュニケーションを図ります。

これは今で言う、「アイスブレイク」<sup>\*3</sup>と呼ばれるものだと思います。からだほぐし、心ほぐしを取り入れ、言葉を話しやすくする状況にし、コミュニケーションを高める方法です。講習会で場を和ませるときによく利用します。私のチームの例で言うと、それぞれの選手が練習前の重要なひとときにアイスブレイクを自分のペースで取り入れていくことができていきました。そして、指導者も自分自身にアイスブレイクを敢えて、取り入れることが重要だと思います。指導者自身が自分なりのアイスブレイクを取り入れることは、選手の心をほぐすことにつながります。指導者である私は、選手にそれとなく近づき、「今日も元気？」、「担任の〇〇先生が授業での発表が素晴らしかったと誉めていらしたよ」など、選手の心が練習前の緊張感と遊びの空間で和らいでいるところで、コミュニケーションを図りました。選手は照れながら笑ったり、「元気ですよ～」と返答をしてくれました。実は、この空間はコミュニケーションを図る絶好の空間であり、選手と指導者が共有できる機会なのです。個人個人に会話することで、練習開始

### ※3 アイスブレイクとは

氷を壊すということ。氷のようになった雰囲気壊すこと、壊す動きをアイスブレイクと言う。本題のためのウォーミングアップの手段。研修や講演でもアイスブレイクは使われている。

#### コーチング 10

指導者自身のアイスブレイクが選手のアイスブレイクにつながる！ 選手の思い込みを払しょくせよ

#### コーチング 11

コミュニケーションを図る空間はオンかオフかを意識せよ

から練習の終わりまで、勢いがぐっと上がっていくのがわかりました。詳しくは、第4章でご紹介したいと思います。

## 9

## 指導者の想いを選手と周囲に伝えることが勝利への近道

指導者は選手にどのようにして想いを伝えるのでしょうか？ 選手一人ひとりと話をする時間は、技術練習に割かれ意外と少ないものです。自分の想いをどう伝えるべきか、私が実践してきたことを書き出してみました。

- ①直接口頭で伝える
- ②選手の周囲の人に間接的に伝える
- ③掲示板を利用して張り出して伝える
- ④日誌に想いを書き込み伝える（選手とやり取りのある日誌）

私は、この4つの方法で伝えたいことを伝えてきました。それぞれの伝え方には選手とうまくコミュニケーションを図るための戦略がありました。これについては、第6章で詳しく解説しています。

そして、選手とコミュニケーションを図るためにもっとも重要な要素は、自分自身のなかにあるオンとオフとの定義や考え方がかなり影響をしていたと思います。私は自分自身に余裕がなかったということも十分ありますが、自分のなかでオンとオフの使い分けをかなり意識して行っていました。もちろんオンは練習やハンドボールに関することになり、オフはハンドボールに一切触れない時間です。この切り替えが、私自身はオンへの意欲につながると感じていました。しかし、そういう私は彼らにとって近寄りがたい存在ではなかったかと思えます。「勝つ」ことに対して選手に厳しいことを要求している以上、自分自身も弱みや苦しさを選手にみせてはならないと感じていました。しかし、オンとオフの切り替えは、かえって指導者である私に余裕のない指導をさせたのではないかと思います。自分自身にもまったく余裕がなく、視野が狭かったという反省です。

指導者は、自分の弱みをなかなか選手にはみせたくないものです。それはなぜでしょうか？ 選手が甘えるからでしょうか？ 選手が尊敬してくれなくなるからでしょうか？ これらについても後ほど述べたいと思います。

**■ コーチング 12**  
指導者の弱みが選手を強くする？ 指導者が選手に対して自己開示を行い、熱意を心から伝えることが大切

## 指導者と選手の秘密をもつ、 想いを共有する、そして選手の役割を つくるのがチーム力につながる

10

集団はいろいろな選手がいて当たり前ですし、そのバランスをうまく勝利という目標に向かわせ、そして役割をもたせながらチームをつくっていくことができると思います。

全国優勝したメンバーは1年生のときからレギュラーになれるような即戦力をもった選手が多くいました。そして、上級生を技術面ではすぐに追い越そうとし、そして追い越すのは時間の問題でした。1年生全員がコートに立って試合をするとき、上級生はどんな気持ちだったのでしょうか？ 人は目標を失えば、必ずやる気を失います。そして、このチームも上級生がやる気を失っていきました。

そこで考えたのが、上級生だけの秘密練習です。これについても第6章で紹介したいと思います。

## アスリートが獲得する ライフスキル

11

目標設定スキルやコミュニケーションスキルなどのライフスキルは、スポーツ場面だけでなく人生のあらゆる局面で有効に働きます。

スポーツの場面では勝つことや技術の向上などの目標に向けて、他者とコミュニケーションを図るために、目標設定スキルやコミュニケーションスキルが身につきます。このスキルは社会のなかで（社会はチーム組織で動いているため）、生かされていくと考えられます。しかし、それが社会で生かされていくためには、選手に主体的に考え、



まずはコミュニケーションから

実践する能力が必要で、これも指導者の重要な役目であると考えています。

スポーツ選手はいつも目標があって、それを達成するための努力を怠らないプロセスを経験できる環境にいます。私は、スポーツをやっている学生には、「スポーツをやっている人は、とてもお得な人生だよ」と言っています。

現在、私はスポーツにおけるコーチングのメソッドを取り出して、スポーツ選手以外の児童や社会人にも研修会を実施しています。そうした実践を通じて出てきた答えは、スポーツをする、しないに関わらず、人間性を育むプロセスの重要性はどれも同じだということです。よってスポーツにおけるコーチングは人と人が関わり、コミュニケーションを図る場においては、どこでも通用するのです。このことについても第5章、第9章でご紹介します。

## 12

### スポーツの魅力とその発信、 アスリートの力を社会貢献に！

スポーツが社会にとって価値あるものであることは、各省庁も認めています。私たちスポーツを愛する人間もその価値を十分認識しています。そしてスポーツの価値を高めるべく、いろいろな活動を行っているアスリートも多く存在します。

アスリートはいつもほかの人たちからみられています。勝てば称賛されますが、負けたり、スポーツマンシップに反するような行為があれば、非難されます。その度合いによってはスポーツの価値そのものが下がることもあります。

アスリートの言動は社会に大きな影響を与えと言っても言いすぎではないでしょう。そうであれば、アスリートがもっと社会のために貢献できる活動ができると思います。第11章では、アスリートの社会貢献をはじめとするスポーツを取り巻く資源をどう活用して社会貢献につなげていくか、その事例を紹介します。

#### [参考文献]

- 1) 『アスリートが「身体を考える」ことの意味』 諏訪正樹・西山武繁 (2009) 身体知学会 SIG-SKI03-34 19-24
- 2) 『指導者に学ぶ―勝利の哲学と人づくり』 新井義文・東海林祐子 (2007) 月刊トレーニングジャーナル ブックハウス・エイチデイ 29巻11号 46-50
- 3) 『同調動作に基づくロボットと人間のコミュニケーション』 畠山誠・西田豊明 (2003) 第17回人工知能学会全国大会予稿集 1D1-05

\*写真提供: 瓊浦高校ハンドボール部、志水孝行選手 (現・湧永製薬ハンドボール部) のお父様である志水清司様より (P.76、79も同様)